

ラジオ放送「福音の光」説教 「神様の望んでおられること」

テサロニケ人のへの手紙第 I 5 章 16～18 節

姫路あけぼの教会牧師 廣田守男

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」（16～18）

皆さん、おはようございます。お元気にお目覚めでしょうか。皆様はそれぞれ幸いな新年をお迎えになられたこととお察しします。「一年の計は元旦にあり」と言いますが、一月も下旬になり如何お過ごしでしょうか。

今年も天地万物を創造され、私たちに命を与えて下さっている天の父なる神様の喜ばれる歩みをしたいものですね。その神様が私たちに願っておられることは何なのでしょう。それは「喜び・祈り・感謝する」ことであり、これが「人生の三脚台、信仰生活の三脚台」と言ってもいいでしょう。

写真を撮る時、或いは測量をする場合等に必ず用いられているのが三脚台です。それを使用することによって、物事を支え、安定するために大切な役割を果たすのです。それと同様、人間関係の複雑な時代、特に天変地異の多い時代に生きる私たちにとってもやはり三脚台を持つことが大切です。それが「喜び・祈り・感謝する」ことです。しかし現実には様々な所を通され、色々な状況に置かれますと「喜び、祈り、感謝する」事は頭で理解していてもなかなかそのように出来ない自分を見いだすことが多いのです。しかし「喜び、祈り、感謝する」ことを教えられたいのです。

最初は「いつも喜ぶ」ことです。私たちは何を喜ぶのでしょうか？

第一に「主を喜ぶこと」です。「今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」と聖書の中に記されています。イエス・キリスト様を喜ぶのです。

主イエス様は私たちのためにこの世において下さり、私たちの身代わりとなって、私たちの罪の責任を背負って十字架に架かって死んで下さり、墓に葬られ、陰府に降り、三日目に死人の内より甦り、贖いの御業を完成して下さったのです。そして天に昇られ、私たちに聖霊を注いで下さるばかりか、私たち一人ひとりのために神様のみ前に執り成しの祈りを捧げていて下さるのです。その主イエス様を喜ぶのです。

更に「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」（ルカ

による福音書 10:20)。様々な奇跡やしるしが起こることも素晴らしいことですが、それ以上に喜ばしいことは、私たちの名前が天国に記されていることです。洗礼を受け、罪を許され、天に国籍を持ち、神様の民の一人とされた喜びです。皆さん方の中にはその恵みに与っておられない方がおられるなら是非主イエス様を信じて救いの恵みに与って頂きたいと願っております。また皆さん方の知人友人の中にその恵みに与っておられない方がおられるなら是非その方の救いを願って祈って参りましょう。

次に「祈り、感謝する」事についてです。

使徒言行録 16 章を見ますと、パウロとシラスとがフィリピの町で主イエス・キリスト様の福音を述べ伝えている時、一人の占いの霊につかれた女奴隷が救われたのです。その結果、女奴隷の主人が儲ける手段を失ったことにより、パウロとシラスを訴えたのです。その事によりパウロとシラスは獄中に囚われの身となり、二人の衣服をはぎ取られ、何度も鞭で打たれ、一番奥に入れられ足かせをされたのです。その時、「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。」と記されています。本来ならば喜び祈れない境遇の中で、パウロとシラスが祈り賛美している姿に圧倒され、他の囚人たちも聞き入っていたのです。そこに大地震が起こって牢の戸が開き、囚人たちの鎖も外れてしまったにも関わらず囚人たちは誰一人逃げ出さなかったのです。それ程までに引きつけられていたのです。看守は囚人が逃げ出したと思い、責任を感じて自害しかけたのですが、パウロは「自害してはいけません。わたしたちは皆ここにいる。」と留めたのです。その時、パウロの前に震えながら「救われるためにはどうすべきでしょうか」と叫ぶ看守にパウロは「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」との約束を語ったのです。その結果、看守は主イエス様を信じたのです。そればかりかパウロとシラスを家に招いて福音を聞き、家族全員が洗礼の恵みに与ったのです。その結果、真夜中に拘わらず喜びに溢れたのです。こうしてフィリピの教会が誕生したのです。

私たちは一人で祈ることも大切です。是非一人ひとりで聖書を読み、賛美して祈って下さい。神様の恵みに満たされ、信仰生活の成長に繋がります。

次いで大切なことは二人のものが心を合わせて祈り賛美することです。二人が寄ると人のうわさ話をしたり批判をしたりしがちですが、是非賛美して祈り合う交わりをする者でありたいものです。

また「感謝」の反対は「眩き」「不平不満」なのです。私たちの生涯においてこの眩き、不平不満が如何に多いことでしょうか。私たちは自分自身に対して、また家族に対し、他の人に対し、組織や様々な事に関わっている者として現実の問題であると思えます。しかもその不平不満が不信仰に繋がっている現実も見せられます。私たちにとってもいつの間にか主イエス様を信じて救われた恵み、罪を赦された喜び、様々な神様の御業に与りながらもそ

の恵みを忘れてしまい、眩き、不信仰に陥っていることはないでしょうか。
願わくは不信仰者の集まりでなく、信仰によって生かされ、感謝に溢れた歩
みであるように求めていきましょう。

聖歌 604 望みも消え行くまでに

1. 望みも消えゆくまでに 世の嵐に悩む時
数えてみよ主の恵み 汝が心は安きを得ん
(折り返し)
数えよ主の恵み 数えよ主の恵み
数えよ一つずつ 数えてみよ主の恵み
2. 主の賜いし十字架を 担いきれず沈む時
数えてみよ主の恵み 眩きなど如何であらん
3. 世の楽しみ富 知識 汝が心を誘う時
数えてみよ主の恵み 天の国の幸に酔わん